

「極限の中のくらしの道具－収容所生活と WarArt (戦争アート)」

会期：2022年 11/18 (金) ~12/18 (日) 場所：1階談話室

昭和16(1941)年12月8日、日本軍がハワイ・真珠湾を攻撃し太平洋戦争が始まると、日本軍はすでに侵攻していた中国、韓国以外にも、外地と呼ばれた東南アジア諸国や南洋の島々にも、大量の国民を兵士として送り込みました。戦場を生き延びた兵士たちは捕虜として収容所に捕らえられ、帰国が許されるまでの数年間をそこで過ごすこととなります。敵国人として連合国家に捕らえられた民間人たちも、また同様でした。

人びとは収容所という過酷な環境の中で、下駄や鉢、台所道具、家具など、生活に必要な道具を自ら作ることもありました。また、空虚な時間を埋めるため、あるいは心の癒しとして、花札、麻雀、芝居の道具、マンドリンやギターといった楽器などの娯楽品や、絵画や彫刻を創作していました。

オーストラリアとニュージーランドという南半球の国々にも、日本兵が作ったものと、強制収容された現地の民間人である日本人と日系人が作ったものが数百点ほど残されていたことが、近年、両国の2名の研究者(Dr. Tets Kimura、Dr. Richard Bullen)により再発見されました。これからは、当時の抑圧された生活の中で人々が何を渴望していたかがよく伝わってきます。このたび、2つの国に残されていた日本人捕虜が作ったものを実物資料とパネルで、またアジアの収容所から日本に持ち帰った2点の道具を紹介します。

開戦から81年、戦後77年が経ち、現在、兵士として戦地を経験した世代はほとんどいなくなりました。その子供の世代にすら、体験や記録があまり伝わっていないのが現状です。日本でも、わずかながら戦地から持ち帰られたモノたちが残り、「戦争」の記憶をつなぐ大きな役割を果たしていますが、それらも少なくなってきました。今が、各家庭に眠る戦争の記憶が掘り起こされる、最後の機会かもしれません。戦争は今また再び現代に起こっています。このたび調査された「War Art」と呼ばれる名もない人びとが作った美術・工芸・道具から戦争を身近なものと感じ、記憶がつながっていくことを願っています。

*戦地から持ち帰ったものを所蔵している方からのご寄贈、または貸し出しをお待ちしています。お心当たりの方はどうぞ博物館までご一報下さい。



捕虜が収容所のオーストラリア兵に贈った絵



収容所に残されていた手作りのはさみ



ビルマの収容所で作り日本に持ち帰った麻雀牌

■関連トーク「強制収容所のくらしとオーストラリア・ニュージーランドに残る WarArt」

2022年 12月10日(土) 13:30~15:00

展覧会に際し、オーストラリアとフィリピンの研究者3名を招き、講演会を行います。一人は、オーストラリアの日系移民史、特に第二次大戦中の日系人強制収容事情について1980年代から丹念な聞き取り調査を重ね、長年調査してきたクイーンズランド大学の永田由利子先生。今年出版した一人の駐在員の日記を読み解いた本を元に、強制収容についての話を伺います。もう一人は、今回展示する War Art を研究しているフリンダース大学のテツ・キムラ先生。オーストラリアとニュージーランドに眠る、日本人たちが作った戦争アートについての話を伺い、そこにフィリピンで日本のアートを研究するチェンチュア・カール・イアン・ウイ先生が加わって、座談会方式でそれぞれの視点と手法から、知られざる日本人の戦時史を掘り起こします。

普段は海外在住の3人のお話を直接聞ける貴重な機会です。

■会場：鶴ノ木八幡神社社務所 大田区南久が原 2-24-1(地図の★印) 開場は13:00

*開場前は昭和のくらし博物館(徒歩2分)で受付します。

■費用：1,000円(入館料込み・お茶付き)

■参加：要予約(30名) 氏名/電話番号/メールアドレス/を添えて、下記博物館まで

メール mail@showanokurashi.com

電話/FAX 03-3750-1808(金・土・日曜日・祝日 10:00~17:00)



抱き合う男女の木彫りの彫刻

バーメラビジター情報センター蔵

テーマ：

「オーストラリアの強制収容所について—ある日本人駐在員の抑留日記より」
「War Art とアイデンティティーについて」
「フィリピンにおける日本の War Art」

永田 由利子氏
テツ・キムラ氏
チェンチュア・カール・イアン・ウイ氏

登壇者：

●永田由利子氏 (Dr.Yuriko Nagata)

1970年明治学院大学英文科卒業、1975年米国インディアナ州立大学応用言語学修士課程卒業、1980年オーストラリアに移住、1993年アデレード大学博士号(歴史)取得。クイーンズランド大学言語・文化学科シニアレクチャー、2014年定年退職後、クイーンズランド大学客員研究員として研究活動が続ける。研究分野はオーストラリアの日系移民史、特に第二次世界大戦中の日系人強制収容事情。蘭領インドネシアから豪州に抑留された駐在員が持ち帰り、後に自費出版した日記『抑留日記 四年間の赤服生活』の英訳書(訳者コックレル・ヒロ子)を共同編集し、2022年に出版。

●テツ・キムラ氏 (Dr.Tets Kimura)

2004年にジャーナリストとして戦時中のイラクから報道。2019年フリンダース大学博士課程(国際学)卒業。現在、同大学で研究を続ける。2022年は国際交流基金日本研究フェローや国立政治大学(台湾)客員教授、オーストラリア人文科学アカデミーのデビッド・フィリップス・フェローなど、日本と台湾を中心にフィールドリサーチを行っている。2月と7月にニュージーランドと共同でJapanese War Artについてのシンポジウムを主催。2023年はオーストラリア国立図書館フェローとしてキャンベラで研究を行う。研究分野はファッションや美術史、日豪関係など。

●チェンチュア・カール・イアン・ウイ氏 (Dr. Karl Ian Uy Cheng Chua)

シンガポール国立大学で修士(日本研究)、一橋大学で博士(社会科学)を取得。現在アテネオ・デ・マニラ大学(フィリピン)日本研究助教。本年は国際交流基金の日本研究フェローとして一橋大学に所属中。専門分野は日本のマンガやアート。

*会場の都合上、申し込みをキャンセルされる方は必ずご連絡下さい。

*イベントは都合により登壇者等の急な変更がある場合があります。どうぞご了承ください。

キュレーション：Dr. Tets Kimura

◎昭和のくらし博物館第企画展「昭和はこんなだった展—『昭和のくらしと道具図鑑』発刊を記念して」

会期：2022年9/9～2023年8/27 場所：本館2階企画展示室

『昭和のくらしと道具図鑑』は、生活史研究者で昭和のくらし博物館館長の小泉和子が監修し、衣・食・住に加え、病気・衛生・出産・年中行事・子どもの遊び・娯楽・戦争中のくらしについて、昭和のくらし博物館の収蔵品を使って解説した本です。その中から一端を取り出して紹介し、昭和戦前から昭和30年代頃までの、工業化や高度成長期以前と今がいかにか大きく変わったのか、くらしを見つめ直すのが本企画展です。企画展に関連し、各トピックのテーマ展示やトーク、ワークショップを随時開催します。



昭和のくらし博物館

(国登録有形文化財 旧小泉家住宅)



開館日：金・土・日曜日・祝日 10:00-17:00

入館料：大人500円・小中高校生300円

最寄駅：東急池上線「久が原」

または東急多摩川線「下丸子」下車徒歩8分

〒146-0084 東京都大田区南久が原 2-26-19

tel/fax 03-3750-1808 mail@showanokurashi.com

http://www.showanokurashi.com

昭和26年建築の木造2階建て庶民住宅と家財道具を保存し、丸ごと公開している博物館。昭和30年前後の生活風景の常設展の他、企画展、特別展を開催。くらしを考える講座を随時開催している。1999年に、家具道具室内史・生活史研究者の小泉和子が設立し、現在はNPO法人昭和のくらし博物館が運営。書斎、お茶の間、台所、子ども部屋、縁側などを巡りながら、四季に応じた昭和のくらしを体感できる。



社務所はこの神社の敷地内にあります

*最新情報は公式SNS(Twitter/Facebook)でも発信しています。

*ご来館の際は、マスクの着用、手指の消毒など、感染症対策をお願いいたします。体調不良の方は来館をお控えください。

*お電話は開館日の開館時間お願いします。少人数で運営しているためお電話を取れない場合がありますこと、ご了承ください